

# 庭

NIWA  
THE GARDEN  
LANDSCAPE ARCHITECTURE

170  
2006-7

## 京都の庭の底力

平成9年12月5日第三種郵便物許可

平成18年7月1日発行

隔月刊誌年6回(奇数月)発行 ISSN 0389-6374



京都迎賓館庭園の設計者が語る

# 庭園意匠のハイブリッド化

三谷康彦

京都迎賓館庭園の計画・設計を担当してきた筆者が、国や文化などの違いに左右されることなく、人間の感性を刺激し感動を与える新しい庭の形を、日本の美意識や感性に求めてきたその完成までのプロセスを綴る



① 《藁しべ》を入れる伝統工法で石を割る

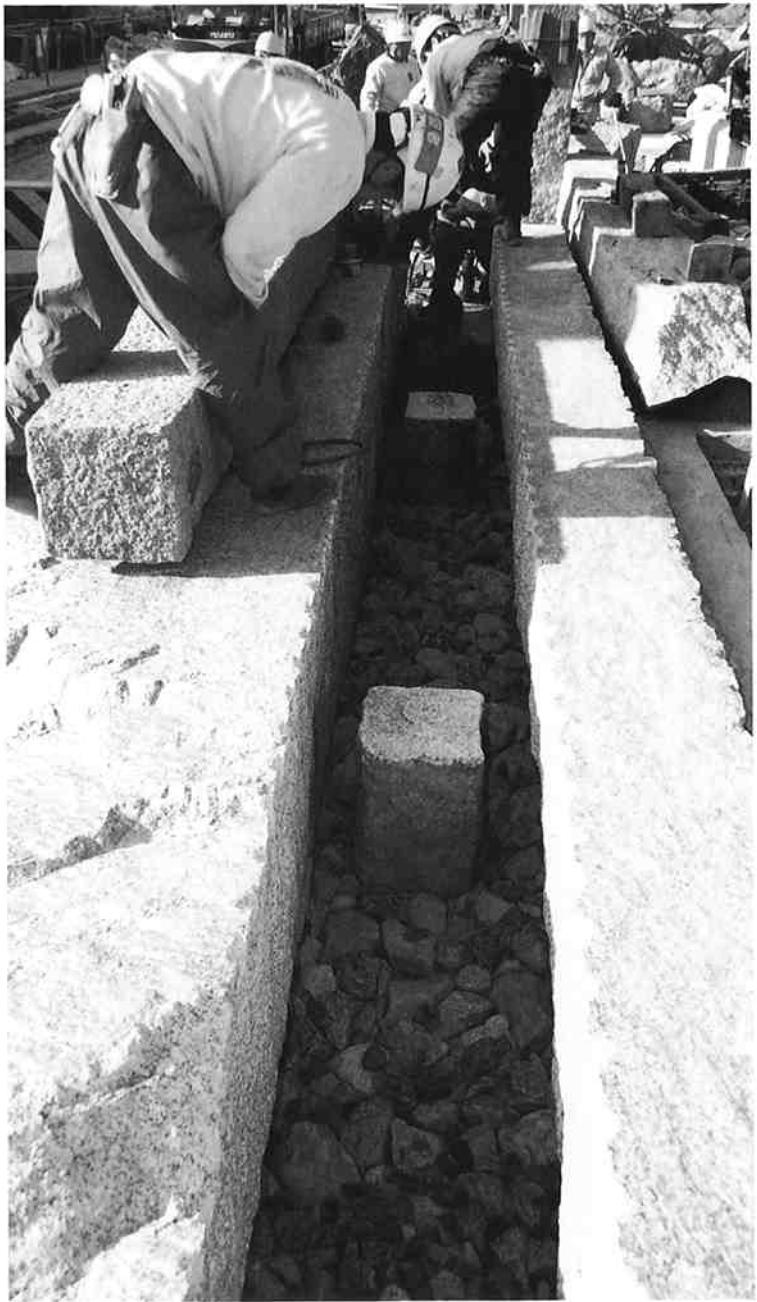
## 「庭」と「ランドスケープ」

「庭」＝「造園」＝「ランドスケープ」とは必ずしもいい切れないのですが、「庭」というものは日本の文化を代表するランドスケープの形の一つとして厳然と存在していますし、また世界に知られています。わたしは「京都迎賓館」(二〇〇五年三月竣工)の庭の構想段階から計画・設計そして設計監理とほぼ九年間かかわらせていただくという稀な機会を頂きました。

とはいっても、現在わたしが所属しています日建設計という日本最大の総合建築設計デザイン事務所に入社してまだ九年目ですので入社以来このプロジェクトにかかわっていた勘定になりますが、そのすぐ前の十六年間はランドスケープの本場アメリカのピーターウォーカー事務所などで「ランドスケープデザイン」の修業を積んでおり、どちらかといえば「モダン・ランドスケープデザイン」の方が得意な人間で在った筈なのです。日本で大学を卒業した後、公共造園の設計事務所に五年、京都の伝統的な庭師の店に弟子入りし五年、三十歳過ぎには庭や造園のことが一通り分かった積もりになつた若気の至り、その流れでアメリカに渡つてランドスケープの武者修業を十六年間もすることになつたのです。

# 「ハイブリッド化」 庭とランドスケープの

こうして「モダン・ランドスケープデザイン」と、伝統的な「庭の意匠」のハイブリッド化が自分自身の中で進んでいったのだと思います。



② 大池に設けた舟着石の設置工事



③ ①の工法で割った石の据え付け

## 素材感と外部の空間構成

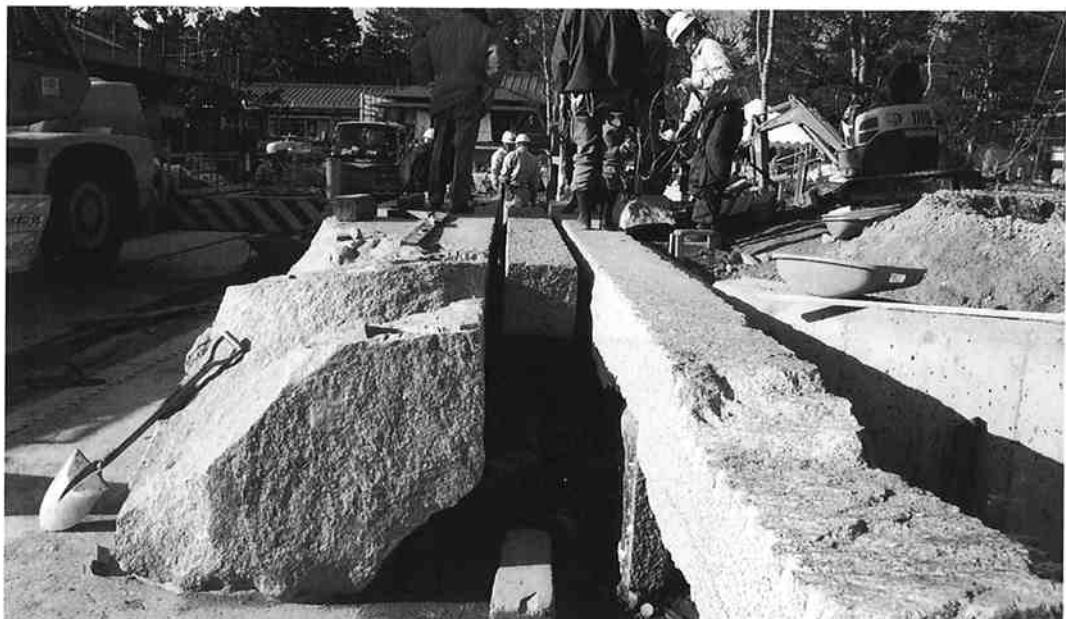
庭やランドスケープを考える上で重要な両輪として、「素材」と、「空間構成」が在ると思います。

私は本体工事が始まるまだ随分前の基本計画時点から、敷地内に生えていた大小取り混せての全ての樹木の移植や再活用計画を立案し、続けて先行工事としての樹木移植も数年がかりで現場にて立ち会いました。大径木は高さが二十五メートル級のものもあり、樹木の環状剥皮工事などのために大掛かりな掘削が行われていました。

庭やランドスケープを考える上で重要な両輪として、「素材」と、「空間構成」が在ると思います。私は本体工事が始まるまだ随分前の基本計画時点から、敷地内に生えていた大小取り混せての全ての樹木の移植や再活用計画を立案し、続けて先行工事としての樹木移植も数年がかりで現場にて立ち会いました。大径木は高さが二十五メートル級のものもあり、樹木の環状剥皮工事などのために大掛かりな掘削が行われていました。



④ 脇(ホゾ)を掘って石を固定するのも伝統工法



⑤ 伝統工法を用いて完成した舟着は、天端が見事にそろっている

た。その時から既に掘削土に混じる美しい色の川砂利を認めていたので、実施設計図書の特記仕様書の中には「建築基礎掘削時に出土する砂利は取り置きし、再利用すること」と言う項目を入れていました。案の定、本工事で敷地内を深く掘削した際に一万五千年以上も前のものともいわれる旧加茂川・高野川の、何層にもシルト層をはさんで層状に厚く堆積した氾濫原の砂利が、予想を超えたボリュームで出土しました。これら全てを、池底や流れ底の化粧、軒内のあられこぼし、石畳などの素材として使用しました。

敷地深くから掘り出されたタダの砂利といえばその通りなのですが、この「京都御苑」という特別な「地勢」や「土地」では、有史以前に川が運んできてくれたこのタダの砂利こそが最も似つかわしく美しい庭園素材であるとの認識や価値観。伝統的技能活用委員会の尼崎博正先生の強い後押しもあって、建主の内閣府様や、施主の国土交通省様のご担当とも価値観を共有することが出来、またそこで「よっしゃ、任せとき！」と、快く具体的な伝統的技能や技術の活用方法を工夫してくれた植藤の佐野藤右衛門さんや植芳の井上剛宏さんたちの京都の庭師や職人衆とのコラボレーションのプロセスが在つてこそ始めて、この土地、この時代、この環境でなければ出来得ないランドスケープの形が芽生えた瞬間でした。

庭の中の要所には、その昔に「水」や「人」と関係が深かつたもので、既に仕事を終えた石造品にここでは別の役割を担つてもらい座つてもらいました。これらの石造品の多くは四国の和泉正敏さんから強引に分けていただいたもの、また井上さんの事務所の前に据えてあつたのに惚れて無理やり分けてもらつたもの、あるいは北白川の西村さんの工房の裏山に置いてあつたものなどで、



⑥ 敷地内の地下から出てきた石の再利用を検討するため、敷石として試みる

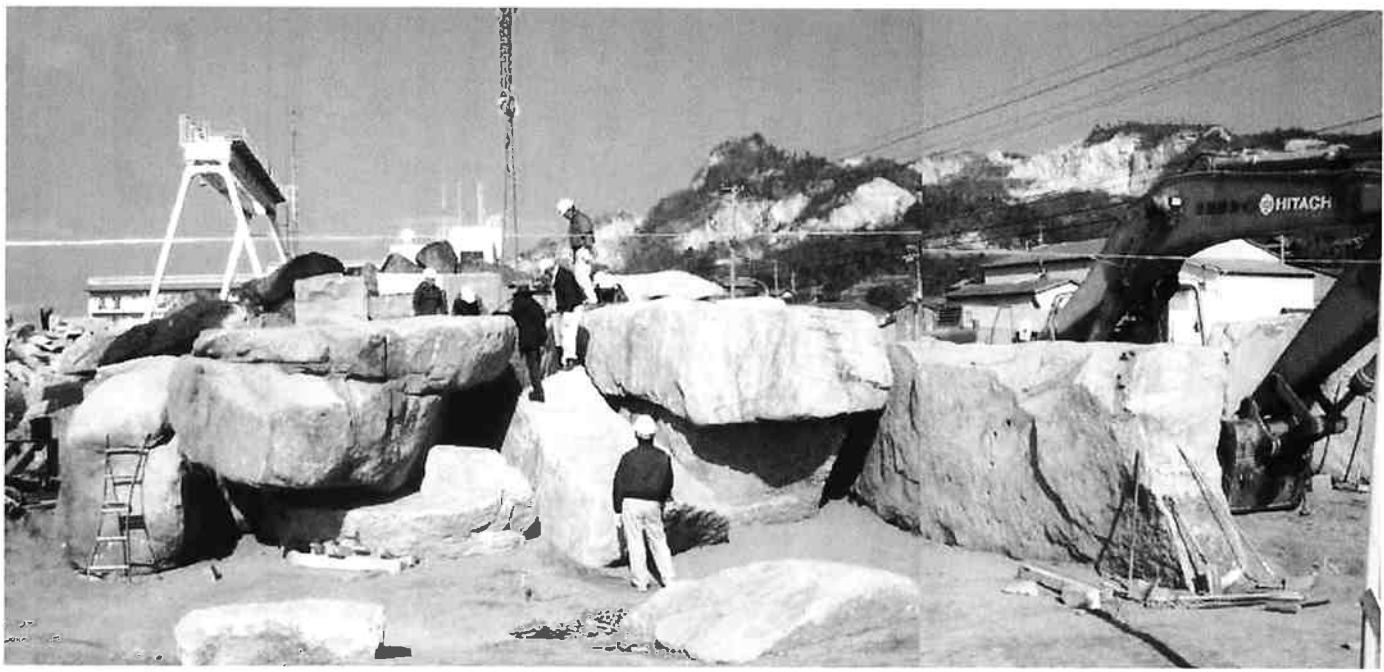
これら全てに共通するのは無名の石工が無心で打ったノミ跡の美しさや時間経過の中で石の表面が美しくなじんだもの。あるいは機能を持っていたもののミニマルな形の美しさ。不必要なデコレーションは一切ありません。

燈籠といった役物はごく控え目にいたしました。尼崎先生の選択上のアドバイスと、熟達した伝統技能士西村金造さんの推薦品で、西村さんらしく力強いものを実際の照明灯具としての機能を持たせた位置に控えめに据えています。西村さんは無理を承知でお願いして竿の部分にドリル穴を貫通して頂き、電線を通して灯りを入れています。

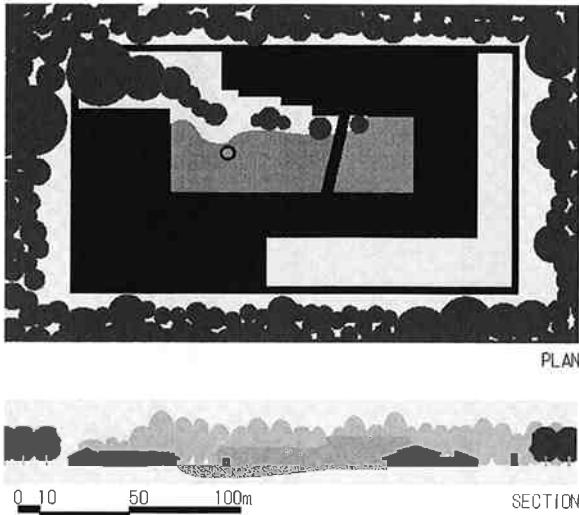
京都迎賓館敷地内の空間構成は通常の「建物」と「庭」との相対的位置関係は逆、ちょうど大きな坪庭状態で建物で庭が囲まれており、建物の周りに庭が広がっている状態ではないのですが、一箇所北東に建物が切れて外周の緑とつながる所を創りました。この北東部分に山の景を作り、昔からあつたような瘦せ尾根が北から貫入して建物を分断、その両側に性格の違う流れを配することが可能な庭園の骨格が出来上がって、気持ちのよい風が通る印象としながら奥行き感を出せたと思います。

また、敷地外との緑の馴染みと借景を積極的に意識して外部空間の拡がり感を演出しながら、かたや軒の深いこここの建築独特の室内の密度を庭園の密度につなげていくのか?伝統的技能活用委員会委員長の中村昌生先生のおっしゃる連続感を醸成して「庭屋一如」とするのかにも、全体統括の日建設計画中村光男社長、建築担当佐藤義信技師長共々大いに腐心いたしました。

結果として日建設計としては、かつてなかつた、「ランドスケープ」の中に、静かに品良く佇む「建築」となり、新たな日建設計の可能性を感じさせる物となりました。



⑦ 鳥取(香川県)で大瀧の仮組を済ませてから現場へ搬入した



京都迎賓館庭園の配置略図(上)と断面略図=日建設計作図  
設計監修:国土交通大臣官房官序當舎部  
建築設計:日建設計/庭園担当:三谷康彦  
建築施工:大林・竹中・鹿島・特定建設工事共同企業体  
庭園施工:植藤造園・植芳造園・花豊造園・小林造園・西武造園



⑧ 現場で打ち合せをする筆者(右から3人目)

こういった建築家とランドスケープアーキテクトの、そして設計段階と施工段階の「ハイブリッド化」ともいえるモノ創りのプロセスは、これから「建築とランドスケープ」の関係の在りように大きな示唆を与えるものとなるような気がします。

## 「花鳥風月」と二十一世紀の ランドスケープ

花鳥風月という日本の伝統的な美意識がありますが、「花」は樹木や灌木・草花・コケなど全てを含めた植物相を、「鳥」は小魚やコイ・鳥類など移動する生物としての動物相を、「風」は日々の移ろいや微気象現象を、「月」は四季の変化や地球や宇宙環境を指しています。この四文字には、我々人類の目指すべきバランスの取れた環境の美しい姿が言い表されていると思います。

ランドスケープという外来の言葉が今や日本でも定着しつつありますが、我々「日本」のランドスケープアーキテクトは「花鳥風月」のいわんとする精神をよく理解すること。そして、顧客や社会の確実なストックになるものを着実に提案し、優秀な施工者とのコラボレーションを続けること。これこそが日本のランドスケープとして世界に誇れ、未来に向けて残りうる物が創れる「可能性」の一つであると思います。それが出来て初めて、設計者・施工者を含めてのランドスケープ関係者の総合的な職能が評価されるということでしょうか。

### みたに・やすひこ

一九四七年、大阪生まれ。京都にて十年間の造園設計と庭園施工の修業の後、一九八〇年米国に渡る。東海岸にてランドスケープアーキテクトの資格を取得し、ランドスケープ設計事務所の経営を一九九〇年まで十年間。その後、七年間を西海岸サンフランシスコの世界的に著名なピーター・ウォーカー事務所勤務、極東プロジェクトマネージャー。一九九七年日建設計入社。現在 日建設計ランドスケープ設計室、設計室長。